

Trastuzumab 投与による Infusion Reaction 発現に関する要因の検討

○東 雄一郎¹, 齋藤 充生¹, 石黒 昭博¹, 長谷川 隆一¹, 齋藤 嘉朗¹, 龍島 靖明², 山本 弘史², 頭金 正博¹(¹国衛研, ²国立がんセンター中央病院薬)

【目的】現在、HER2 陽性乳がんに対する標準治療薬とされる Trastuzumab (T) は、高頻度に副作用としての Infusion Reaction (IR) を発現する。本研究では、T による IR 発現に影響を与える因子を検討するため、後ろ向きコホート研究を行った。

【方法】2008 年 2 月から 2009 年 9 月の間に、国立がん研究センター中央病院において T による術後補助化学療法を施行した患者を対象として、IR 発現の有無とともに T 療法のレジメン、施行前の患者背景、前治療歴、検査値等を調査した。

【結果・考察】調査対象期間内に術後 T 療法が施行された患者は 60 症例であり、このうち術前にも T 療法が実施された症例は 23 例であった。IR は 30 件 25 例 (41.7%) に発現し、いずれの症例も Grade1 又は 2 であり、入院加療を要する重篤な Grade3 以上の IR は認められなかった。また、術前・術後 T 療法が実施された症例のうち術前 T 療法において IR が発現した症例は 10/23 例 (43.5%)、術後 T 療法のみが実施された症例のうち IR が発現した症例は 14/37 例 (37.8%) であった。IR を発現した患者集団 (IR 群) 25 例と発現しなかった患者集団 (非 IR 群) 35 例の患者背景を群間で比較した結果、IR 群は非 IR 群に比べ有意に閉経後の症例が多く、より高年齢である傾向が示唆された。疾患背景に関しては、IR 群では非 IR 群に比べて有意にプロゲステロンレセプター感受性が低いことが示された他は、両群間に違いは認められなかった。また、既往歴、前治療歴、その他患者背景については、両群間に特段の違いは認められなかった。IR の発現メカニズムに性ホルモン感受性等が関与している可能性が考えられたが、これらの要因は両群の年齢の違いによる可能性もあり更なる検討が必要と考えられた。